

# 生駒支部見学会「環境共生住宅からエネルギーを考える」を終えて

## 1 はじめに

昨年3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらし、原子力発電所事故も引き起こしたのは周知の事実である。この事故により将来的な電力供給形態の変換が求められる一方、輸入に依存する石油などの安定供給に対する懸念も広がっている。電力使用量削減や新エネルギー・再生エネルギー・創エネルギーへの転換は、建築分野においても必須の命題となっている。

本見学会の目的は、このエネルギー削減対策の一環となる環境共生住宅の原点を捉え、それらを日頃の業務に生かすため、妙喜庵「待庵」・聴竹居・水無瀬神宮「灯心亭」を見学した。

## 2 妙喜庵「待庵」

妙喜庵は室町時代の明応年間（1492年～1500年）の創建で、寺号は宋の大慧禅師の庵号からつけられたものである。境内にある待庵は現存する茶室建造物としては日本最古で、利休の遺構としては唯一のものである。にじり口が設けられた小間の茶室は、数寄屋造りの原型となっている。掛け込み天井と棹縁天井を組み合わせ、床間の隅や天井を塗り廻した室床は、二畳敷の割には広く感じられる。連子窓の大きさと下地窓の配置は、室内の明るさを考慮して決定されている。

狭い空間であるにも関わらず、荒壁や窓の配置・室床などで狭さを感じさせない手法は、利休の非凡な構想力を窺い知ることができた。

## 3 聴竹居

聴竹居は建築家 藤井厚二が1928年に建設した自邸である。建屋構造は木造平屋建、平面配置は本屋・上閑室・下閑室（茶室）の3棟で構成している。藤井氏は早くから環境工学に着目し、自邸を環境実験住宅として、日本の気候や風土になじみ、かつ、西洋的な空間を融合させることに成功した。東南端にある縁側は夏季の直射日光を避け、逆に冬季は日射熱を取り込むことができる。居室は温度変化の少ない中央に配置し、居室から連続する畳間は腰掛式と座式の人の目線が合うよう30センチ程度高く設定されている。その床下に設置された導気筒は夏の西風を取り入れることにより冷房の役割を果たし、取り入れた空気は各室に設けられた排気口から吸気して屋根裏を通風し、最終的に大気開放しているので、屋根裏換気システムを兼ねている。

このように、自然と調和したデザイン、換気・通風を配慮した健康で快適な居住空間は、環境共生住宅の先駆けとなった。もし、藤井氏が早世していなければ、現在の住宅環境はもっと進化していたであろう。

## 4 水無瀬神宮「灯心亭」

水無瀬神宮は木津川・宇治川・桂川の3つの川が合流する離宮の跡地に造営され、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を奉っている。その一角にある井戸から湧き出ている伏流水が離宮の水で、全国名水百選に選ばれている。境内にある灯心亭は、御所から移築した茅葺き寄棟造の茶室である。天井には山吹・トクサ・ヨシ・萩など十種余りの灯心の材料とされた草木を用いられている。この灯心亭という名の由来に諸説があるが、明り障子の藤の細い白い線が灯心に見えることから名づけられているようである。

当日、内部が見通せるように開放されていたが、修復が必要なほど、荒廃しているように見えた。しかし、庭園に馴染んだ茅葺屋根や、優雅な明障子は気品にあふれており、今度は是非、離宮の水で茶を嗜みたいものである。

## 5 おわりに

1997年に京都議定書が発効され、温室効果ガスの1つである二酸化炭素の排出が少ない社会を構築するため、建築分野においても新エネルギー・再生エネルギー・創エネルギーへの転換を図っていかなければならない。建築士として温室効果ガスの低減に貢献し、自然と調和したデザイン、健康で快適な居住空間を提供していかなければならない。そのためにはもう一度初心に帰り、環境共生住宅の原点に振り返るのも必要だと考える。

本見学会において、待庵でご説明いただいた佐藤洋司先生、聴竹居でご説明いただいた東野忠雄先生、並びにスタッフの皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

